

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	鏡の間 : 学級グループ日誌より
Author(s)	市山, 仁美
Citation	児童の言語生態研究 , 6 : 61 - 63
Issue Date	1973-11-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045075
Right	
Relation	



鏡の間

— 学級クルー日誌より —

大正小・六年一組 **K** 君作

十二月十六日

ブローグ

このあいだの著作権侵害シリーズは、たいへん人気があったのですが、新美南吉か、のま千代三かというのが、どこからともなくあらわれて、こういったのです。

「なあ、おまえ、文学界というところは、そんなにあまいもんでおまえんで。もっとまじめにやれ。」

大多和家シリーズ第二弾

ノンフィクションアワー

二郎の家

二郎物語では、生きのびた二郎がどう死んでいくか。

二郎文庫 第一四〇

二郎は頭(オツム)がわるいので、サラリーマンをあきらめて、職人になろうと考えようふ屋へ弟子入りしたのだが、豆は使わず、せんたく糊を固めて作るのを見て、うんざりしてしまい、板前になろうと決心した。しかし、板前の試験はむずかしく、板前になるためには、英語仏語独語露語米語日本語、古代くさびがた文字それにローマ字がわからなくてもいいが、ミミエ語がわからなくてはいけないというので、しかたなく近くのどぶ川にミミエをとりにいった。ところが最

近は、工場が発達したため公害も発達し、ミミエが一びきもないことがわかった。(なるほど、こうやってそれを食べるさかなのことをつかもうとしているらしいが、競争率もへって、なかなかいい。)仕方がないので、ミミエのいる場所をさがすため、動物大家のムツゴロウ氏のところへいった。それによると、いった時、ムツゴロウ氏は、TVのわたしの自まん料理という番組に出ていた。その自まん料理というのは、近くのおかず屋へいってさめたコロッケを買って来る。もし、コロッケが暖かかった場合は、ヌカミソづけにしてカチカチにしてしまう。またコロッケは、肉がなるべく少なく、いもばかりはいったもので、肉が少しずつはいいものがよい(カンガルーの肉がはいっていないものが多い)。もし、肉がたくさんはいっていたら、アンパンといっしょに食べてしまう。

話がそれた。実は、そのコロッケをトースターの中にはさんで、両面をこんがり焼く。この場合うすいコロッケがよい。それにカリフラワーでもそえて食べる。実においしい。

私は、こんなことを書こうとしているのではなかった。もちろん、こんなことは、この五さつ目を終わらせてしまうための一つの手段としてやっているのである。

ところで、ムツゴロウ氏にききにいくと、そんなことは知らないといって、あっさりことわられた。ムツゴロウ氏は、角川文庫から、『天然記念物の動物達』という本を、畑正憲(ムツゴロウの名前、これも本名かどうかかわからない。)という人が出しているが、こんな本は、絶対に買わない方がいい。

ところで、二郎の今晚のおかずは、ミミエであった。これは、どうしたのかときくと、(配偶者がちゃんと

いた。)タケをきってきたら中から出てきたんですよ。聞くとその竹はもうとくに、全部かってしまったことがわかった。ふと二郎は、昔のことを思い出した。いまから十一年も前の話である。二郎の住んでいた土管のあった公園は、沼に近かった。その沼にも、もう何年も前から、へびが住んでおり、ある日、公園の整備をしていた時、そのへびがあがってきたように思われたが、それは、二郎が、ゴムのへびを糸でつって運んできたものであった。そこに本物のへびがあがってきた。だれも、本物と思わずふんずけたり、けつと

ばしたりしているうちに、へびが、興奮して発狂した。おどり狂う毒蛇を見て人々はやっ和本物と気がつき、あわてふためき、すこぶるおかしくなってしまったのであった。そこに、正義の味方サンターマスクがあらわれ毒じゃの首をつかむやいなやばつと首をひきちぎり、むしゃむしゃと食べてしまった。そこに胴体を残して。それをみんながおもしろがって、キュービーマヨネーズのびんにつめその中にドブからたくさんミミエを取ってきて、大びんの上の口までいれてしまった。それを二郎のほうへ持ってきて、「さっきのことが起こったのは、おまえのせいだ。」などといって、口々わめき、二郎にそれをかけてしまった。二郎はそれをむしゃむしゃ食べてしまった。

しかし、今日、そのような風景は、今では見られない。

私は、このようなことを書こうとしているのではなかった。ミミエは、モグラが食べているのである。

二郎は、ミミエは、モグラが食べているということ聞き、穴をほってミミエの出るのを待った。ところが、モグラが出てきてしまっ

て、「おまえは、だれか」という。

「ぼくは、人間ですよ。」と答えると、モクラは、目が見えないらしく、いきなり、とびかかってきた。そこで、がんばって、にげだしたのだが、そこが、ほかの人の家の庭の中に出てしまった。その家の人は彼をバカかキチガイあつかいにしたが、ミミズをさがしていることをして、つりぼりにいけば、ミミズがたくさんいるということを教えてくれた。

そこで、つりぼりに行った。そこでは、みんな、いっしょうけんめいにつっているので、ミミズの一びきや二びきくらいわからないと思っただが、取ろうとすると目を向いてこういふのである。

「シラミーシラミーソラシラミー。ミミズが、ほしけりゃ飛んでゆけー。」

仕方がないので、えさのミミズをちょうだいすることにした。そこで、二郎は、水の中におそるおそるはいついたミミズが、つりぼりの先にひっかかっている。そう思うだけで、心がおどった。ミミズに手をのばした。それを見て、ミミズは、左右に動く。それを見てとったのか太公望の手は、つり糸をリールでまきあげる。それに、二郎の手は、とられていっしょにつりあげられてしまった。二郎は、ミミズを取った興奮でおこられていることなど気にもとめなかった。二郎は、用のすんだつり堀とは、バイバイし、一気に板前試験センターへはしっていった。しかし、その喜びは、長くは続かなかった。ミミズを落としてしまったのだ。二郎が、はなをほじくっている間ににげていってしまったらしい。「あーあ。」二郎は、絶望のため息をもらした。二郎は、すっかりぐれてしまった。そして絶望の死への道歩んでゆくことになった。

第一部 終わる

好ひょうのため続編

第二部

二郎は、大工になろうと決心した。自分は何んとなく大工に向いているような気がしてたまらなかったからだ。

大工の修業は、つらい。十日の間に大型トラックを全部食べてしまわなければならないのだった。

「どこへ行っても食べることばかりだなあ。」と二郎はいった。

修業には、三人のガードマンがついていることになっていた。そのガードマンたちのおなかは、ぷりぷりふくれて、あとでわかったことだが、この試験に合格しているということであった。

二郎は、最初食べられそうなチョコレートでできたハンドルに手をのばし、むしゃむしゃ食べてしまった。次にあつい生クリームのカベでできたカベを食べはじめた。早く食べないとぼうふざいなしの自動車はくさってしまうからだ。

二日目 きょうはビスケットでできたタイヤを食べはじめた。タイヤは、むしゃむしゃ快い音を放ち、はいき口は、「ブスブス」とみょうな音をたてはじめた。めんどうくさいので、はい気口もたべてしまった。それ以上はなにも食べられそうでなかった。

三日目、きょうは、かたいチューインガムでできた天井と水ざとうでできた窓を食べはじめた。チューインガムは、思ったよりかたくあまったるくてなかなか食べるほうは、はかどらない。水ざとうもあまったるくて、すこし、気持ちが悪くなったのだが、二郎は深い快感によいしれるのであった。

四日目の朝、しもおおっていた。

二郎は、きのうきもちがわるくなり、朝、はらいた

をおこし、その中には、下痢かという状態におそわれた。

病氣といえ、へんとうせん、へんとうせんといえ、病氣であるが、へんとうせんという病氣におそわれて学校へ出て来た時には、

「きのうは休んだけど、どうしたんだ。」や「病氣って聞いたけど、何ていう病氣？」と聞かれても何にも答えねばよろしい。なぜならへんとうせん（返答せん）だからであるからだ。

五日目 まだ、病氣は治らず、ますます、悪化していく一方であった。

六日目 熱が三十九・八度もあって頭が、がんがんにしておかしくなりました。

七日目 ウッウウウなりながらも少しずつ熱がさがってきた。実にいい傾向である。

八日目 なんとか熱がさがったが、まだ、体がだるい。しかし、もうやせて、もう絶食して明日から再チャレンジ戦を夢見ている。

九日目 また再チャレンジ戦である。アイスクリームのシートは、どろどろにとけ完全に見事にくさり、悪しゅうがぶんぶんしている。

二郎は食べる気がしなくなりました。

しかし、食べなければ、大工になれないという。

二郎は、仕方なしに、そのはいせつ物のようなかたまりを手にして食べはじめた。

とろけるようなかおり、馬のおしっこみたいなにおい。非常にまずい。はらいたがぶりがえすことをびくびくしながら、二郎は、無心で、食べた。はと茶ミルクを飲む時のように。ポテトチップの破へんがはいつていた。きつと、アクセルか何かに使われているのだらう。とても食べきれない。でも、あと一しょうびん

に一びんくらいしかない。がんばれば、一ばいになるだらう。

十日目 もうだめだ。また腹いたが、ぶりがえしてしまった。いつもなら、口の中にいれてのみこみあとではき出せばいいのだが、そのみこむことさえ医師にとめられているのでしかたがない。

大工の試験に落ちた二郎は、いっそ死んでしまおうかと思ったりしたが、結局、気が弱い二郎は、そんなことはできなかった。（ほんとうは、ここで死なれてしまおうと話がなくなることである。）

二郎は、東京の町をぶらぶら歩きまわった。山手線を乗りまわしたり、ゴーゴークララへいっておどったり、新宿の京王プラザビルへのぼったりした。また、時間があつたので、ホーリング場へ行ってみた。二郎は、ホーリングというものは、とくに苦手でハイスコア（ハイゲーム）が、百二十点で、全然だめであるが、きつ茶店でポルノ写真を見ているよりましだと思つたのであろう。

ところが、全然だめなホーリングで、二三〇、二八〇、二七五、二四二、三〇〇とウツつづけにすごい記録を出し、いばっていた。ところが、どうも、これはおかしいという意見が出てしらべて見ると、トミーのパンチアウトホーリングゲームでやった記録だということがわかったが、そんなことは、どうでもいい。

ホーリング場を出た二郎は、ここが東京タワー赤羽ポウルであったことを思い出し、上の東京タワーを見あげた。

「たまには、上にあがってみるのもいいな。」といつた二郎は、上にあがった。エレベーターがこわかつたので階段であがった。タワーの上から東京の町を見ているうちに、二郎は大工の職が自分にはむいていな

くて、板前の仕事の方が、自分にむいているといううな変な考えが、頭にこびりついてはなれなかった。すると、ガラスのむこうに、ミミエの浮いているのが見えた。二郎は、ミミエを追って飛びついたりと思つたしゅん間、ミミエは、ひらりと身をかわし、二郎はまっさかさまに下に落ちていった。

この悲しみをやわらげるには、だれかのいった次の歌がよろしかろう。

アアー

ソクラテスもウッコした。

ドゴールもウッコした。

美空ひばりもウッコした。

人間みなおんなじだ。

きやん
完

（報告者 大正小 市山仁美教諭）

